

瀬戸内オーシャンズXの取組み ～連載第5回～

瀬戸内
オーシャンズX瀬戸内オーシャンズX推進協議会事務局
松浦 正樹

1. はじめに

瀬戸内オーシャンズX(日本財団と瀬戸内4県(岡山県、広島県、香川県、愛媛県)による海洋ごみ対策プロジェクト)は、2025年までに瀬戸内海への新たなごみの流入を70%減らし、回収量を10%以上増やすことを目標とし、瀬戸内海の海洋ごみの全体量を減少傾向に転じて問題解決へ繋げていくことを目指しています。本誌では、集中連載として2022.No.83から瀬戸内オーシャンズXの取組みを紹介しています。

2. 4県連携企画

2020年12月の日本財団と4県との調印を基に発足した瀬戸内オーシャンズXですが、コロナ禍の影響もあり、大きなプロジェクトについては、当初は動き出しが鈍いこともありましたが、その一方で、この間に一般化が進んだweb会議システムにより、4県の担当者レベルでは、週一回、30分程度を目安に会議を重ねています。会議と言っても堅苦しい形式ばったものではなく、担当者どうしが自由に、柔軟な発想で海ごみ対策に向き合うということで、名前も「わくわく会議」という名称で開催しています。同じ県庁内でもこれほどの頻度でやり取りを重ねている部署はそうそうないと思いますが、県を跨いでこの頻度で同じ問題に向き合うことは稀有なことであり、瀬戸内オーシャンズXが始まったことによる、この4県にできた大きな財産の一つだと思います。この「わくわく会議」では、各県の海ごみ対策の情報交換などのほか、瀬戸内オーシャンズXとして4県で何をやっていきたいかなどについても話しており、今回はそんな「わくわく会議」発の取組みを紹介します。

これまで本誌で紹介した取組みは、日本財団が主導、または各県と日本財団が綿密に調整しながら実施した事業(アクセス困難エリアでの回収実証や、川ごみ調査結果)であり、今回は4県が一丸となり取り組んだ事例です。わくわく会議発の取組みは4県担当者で案を出し合いながら実施しています。

3. 4県同時開催清掃イベント

令和4年度は、自分の地域のこと、他県のこと、そして何より瀬戸内オーシャンズXとして4県が一緒に取り組んでいるということを広く周知するということも含めて、日本財団「海と日本プロジェクト」に取り組む各県の地元放送局が核となった推進主体の協力も得ながら、瀬戸内海に面する4県で、同日・同時時間帯に、街の象徴的な存在である各県の城下に集まり、各地域の海洋ごみの特色を県民に伝え一緒に清掃活動を行うイベントを開催しました。4県の会場は別々でしたが、出陣式と帰陣式ではオンライン中継で全会場をつなぎ連動しました。各地域にはそれぞれ、歴史や地理、産業、人口など特徴があり、海洋ごみ対策もそれぞれに合う取り組みを進める必要があります。たとえば岡山の会場、岡山城がある県南部は、全国でも有数の用水路が多い地域で、「用水路チーム」と「街チーム」に分かれて清掃を実施し、参加者の意識を用水路や街中のごみに向けるような仕組みにしました。また4県の中でも人口が多い広島県では、都市の散

乱ごみが課題で、約 100 名もの参加者で、福山城周辺の市街地に散乱するごみを回収し、人と生活とごみについて考えるきっかけをつくりました。愛媛と香川は、海城である今治城と高松城の周辺で清掃を実施し、参加者は、瀬戸内海と暮らしの近さを体感し、街中のごみが海に流れ出ていることを実感しました。また、どのエリアでも共通する、実はごみが多いポイントである側溝や植え込みの間などにも注意しながら、ごみ拾いを行い、当日は 4 県合計で約 300 名が参加し、約 240 袋・100 kg のごみを回収しました。自分が生活する地域の特色を知り、隣り合う地域の話聞き、お互いの違いや共通する課題を認識するとともに、同じように瀬戸内海を大事に思う仲間がたくさんいることを感じられるイベントとなりました。県を跨いでの連携イベントというほか、ご協力いただいた放送局におかれましても、系列が違う中の連携イベントであり、大変なご苦労をされたと思います。



写真1 瀬戸内オーシャンズ X お城下清掃の陣～海ごみの発生源は街中にあり！～出陣式(開会式)の様子

4. 4県合同清掃&交流会

令和5年度は、各県の地域で活動している清掃団体・プロボノ等約 50 人が一堂に会する清掃活動と交流会を開催しました。今回集まった場所は広島県江田島市で、フロートや防舷材に使われていたであろう発泡スチロールの破片が大量に散乱、砂と混じりあい堆積している海岸で清掃活動を実施しました。事前の打合せで、海岸に大量の発泡スチロール片があるといった状況や、現地の団体は熊手で清掃をしているといった情報は聞いていましたが、実際砂浜を見て状況の深刻さを実感しました。私は今の担当になって海ごみについてじっくり向き合うようになりましたが、普段は香川県内の



写真2 掘っても掘っても発泡スチロール片

どうも流れ着いてから破片になったのではなく、破片が流れ着いているよう

海岸しか見ていないので、香川県の海ごみの状況(生活ごみが多い)はすぐに想像でき、発泡スチロール片が多いと言われても、波打ち際など一部に筋のようにたまっていたり、砂の中に散らばっているくらいを想像していました。当日の砂浜の状況はそうではなく、十数センチか多いところは数十センチほど積み重なった発泡スチロール片の上に砂が被っているような状況で、上を歩くとふわふわとした感触がする、両手で掬っても掬っても下に発泡スチロールの破片が見える、といった具合でしたので、熊手で集めるというのもこの現場では効率的な手法というのがよくわかりました。今回回収したごみもゴミ袋のほとんどは発泡スチロール片でいっぱいになったものでした。以前、愛媛県の宇和島市での清掃活動に参加した時も同様でしたが、場所毎にごみの様子は違っており、地元の人は様々な苦労をしながら海ごみ問題に向き合っていると考えさせられました。



写真3 回収したごみ(ほとんどが発泡スチロール片)

また、今回のイベントでは、清掃だけでなく、交流会(グループディスカッション)も開催しました。もともと熱心に活動している方々が集まったのもあり、意見交換は盛り上がり、後継者やスタッフの人材育成、資金やリソースの課題、活動の効率化と評価、参加者への啓蒙やPRなど、様々な話題で話し合い、そもそも製品を作る時点で、ごみとなった際に拾いやすい製品設計をしてはどうかなど、目から鱗のようなアイデアなども出ていました。

今回、他エリアの状況や、そこにも同じ志を持っている仲間がいること、また、同様の苦労を抱えているなど清掃活動と交流会を通じて、みなさんのモチベーションの高まりを感じるとともに、参加者からは次はまた別のエリアでの開催を望む声や、定期開催の要望があるなど、とても有意義な会となったと考えています。各県独自での事業ではこういった県を跨いで交流の機会を設けることはなかなか難しいところがありますので、瀬戸内オーシャンズXの取組みで実現できたことはとてもよかったと思います。これを機に、今回交流したメンバー同士がつながり、連携した活動へと発展できるよう、引き続き支援していきたいと考えています。